

## III. 作成の概要

### Production of the Red Data Book

#### 1. 調査・選定の体制

本書を作成するに当たり、鳥取県内の絶滅のおそれのある野生動植物の生息・生育実態を把握するため、平成10年度から12年度までの3年間にわたり、「鳥取県野生生物生息実態調査事業」を実施した。

その際、平成10年度に野生動植物に関する学識経験者からなる「鳥取県野生生物調査検討委員会」を設置し、具体的な調査方法や調査結果の評価および選定の手法等に係る検討を行った。検討委員会は、平成10年度から12年度まで8回にわたり開催した。

野生植物については、平成10年度から12年度の3年間、県下全域において絶滅のおそれのある野生植物の選定とその分布状況の実態を把握するための調査を、鳥取県が「鳥取県自然環境調査研究会」に委託して行った。

調査は、これまでの文献調査及び県内外所蔵の標本調査に基づく基礎データの収集、ならびに現地調査を行い、これらの調査データをもとに、県内における絶

滅のおそれのある野生植物をリストアップした。

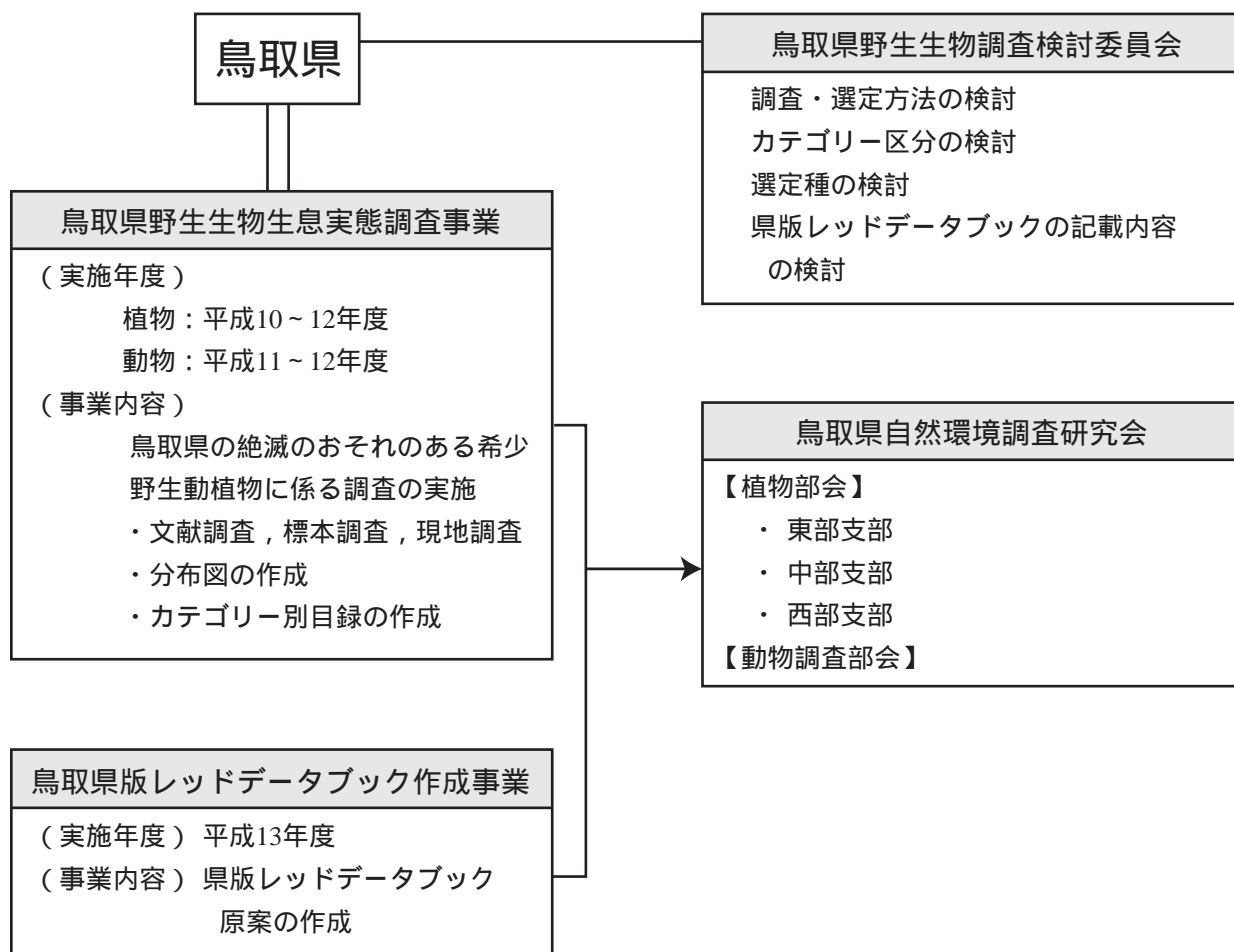
鳥取県自然環境調査研究会の植物調査部会では、県の東部・中部・西部の3つの地区に調査のための支部を組織して検討を行うとともに、各支部の代表者が植物調査部会において検討および支部間のバランスの調整等を行う体制をとった。

調査結果は、調査年度ごとに鳥取県自然環境調査研究会から提出された調査報告書に基づき、鳥取県野生生物調査検討委員会において結果を検討し、最終的な鳥取県の絶滅のおそれのある野生植物を選定した。

鳥取県版レッドデータブックの原案の作成は、平成13年度に鳥取県自然環境調査研究会に委託して行った。

なお、この調査の実施および県版レッドデータブック原案のとりまとめに当たっては、県内の野生植物研究に携わる大学、試験研究機関、学校関係等の民間あるいは各種学校等の専門家、あるいは野生植物の専門的知識を有する民間の方々に参加している。

#### 調査・選定等の体制



## 鳥取県野生生物調査検討委員会

氏名	所属
安藤重敏	鳥取県立博物館
江原昭三	鳥取大学名誉教授
清末忠人	鳥取県自然環境保全審議会委員
國本洸紀	鳥取県立倉吉西高等学校
清水寛厚	鳥取県自然環境保全審議会委員
田中昭彦	鳥取県生物学会, 日本植物分類学会会員
鶴崎展巨	鳥取大学教育地域科学部
橋詰隼人	鳥取県自然環境保全審議会委員
細谷賢明	日本野鳥の会鳥取県支部長

\* 所属は, 検討委員会を開催した平成10~12年度のもの  
鳥取県自然環境保全審議会は, 現鳥取県環境審議会

## 鳥取県自然環境調査研究会 植物調査部会

部会長	清水 寛厚	鳥取大学教育地域科学部
支部代表者		
(東部)	田中 昭彦	鳥取県生物学会 会員
(中部)	森本満喜夫	倉吉北高等学校
(西部)	棚田 耕吉	鳥取県生物学会 会員

## 支部(原稿執筆協力者)

東部	井上喜美子	鳥取県生物学会 会員
	木原清志	鳥取城北高等学校
	清末忠人	鳥取短期大学 非常勤講師
	清末幸久	鳥取県立博物館
	小林一彦	鳥取城北高等学校専攻科
	坂田成孝	鳥取県生物学会 会員
	田中昭彦	(前掲)
	西尾幸弘	鳥取県生物学会 会員
	浜橋和子	鳥取県立白兔養護学校
	前田雄一	鳥取県林業試験場
	松本 綾	智頭町立智頭小学校
	山本賢二	若桜町立池田小学校
	山本晴恵	鳥取県生物学会 会員

中部	伊沢寛治	東伯郡東郷町在住
	磯江茂秋	東伯郡北条町在住
	長 兼巳	鳥取県生物学会 会員
	河合純子	東伯郡羽合町在住

佐藤幸子	倉吉市在住
中石君子	倉吉市在住
古田 収	倉吉市在住
古田美由紀	倉吉市在住
森本満喜夫	(前掲)
矢城住子	東伯郡三朝町在住
吉田 宏	倉吉市在住

西部	加藤 努	米子市在住
	神谷 要	(財)中海水鳥国際交流基金 財団 米子水鳥公園
	小西 毅	米子市在住
	澤田裕二	鳥取県立日野産業高等学校
	鷺見寛幸	鳥取県立大山青年の家
	田中盟人	米子松陰高等学校
	棚田耕吉	(前掲)
	飛田 彰	日野郡日野町在住
	野川 茂	西伯郡淀江町在住
	野津 昭	米子市在住
	浜田幸夫	米子市在住
	藤原敏博	米子市立福米東小学校
	藤原文子	名和町立名和中学校
	松井正樹	鳥取県立米子高等学校
	宮倉 誠	会見町立南部中学校

## 植物同定協力者

中池敏之, 村田 源

## 写真・データ等協力者

青戸政義, 青戸元文, 上田伸治, 岸田哲夫,  
國井秀伸, 佐藤克則, 下田 登, 中尾茂樹,  
西尾一夫, 浜辺正篤, 原田隆史, 福田幸和,  
山本悟司, 山本 聡, 吉野由紀夫

## 編集ワーキンググループ

編集	清水寛厚 (前掲)
	坂田成孝 (前掲)
	鳥取県生活環境部環境政策課
編集協力	田中昭彦 (前掲)
	棚田耕吉 (前掲)
	西尾幸弘 (前掲)
	森本満喜夫 (前掲)

(以上五十音順, 敬称略)

2. 調査・選定およびカテゴリー評価

(1) 調査・選定の方法

調査・選定の対象は、鳥取県内に自生する種子植物及びシダ植物とした。

選定に当たっては、現地調査および所蔵標本から得られた植物の分布情報を、環境省による自然環境保全基礎調査用の都道府県別メッシュマップ(1997)に表記された3次メッシュ\*を基準単位として、生育地、海拔高、調査者、標本・写真の有無等を記録し、これをデータベースとした。垂直分布は、誤差を考慮して100m単位で記録した。分布図は、コンピュータプログラムにより、データベースのデータをもとに自動的に水平・垂直分布図が描かれ、各種スケールの分布表示が可能なものとしている。

\*【3次メッシュ】

国土数値情報の標準地域メッシュの第3次地域区画で、経緯度線を基に区切られた矩形である。

一つの3次メッシュは、2万5千分の1の地形図を100に分割した大きさに当たり、その大きさは東西・南北ほぼ1キロメートルである。

この分布データベースをもとに表示される分布情報や個体群の状況、採取圧等各種の人為的な影響等を考慮し、下記の選定の考え方に従い総合的に判断して種を選定した。その際、種ごとの情報整理のため、分析データ一覧表(pp180-193)を作成した。

(2) カテゴリー別評価の方法

カテゴリーの設定

絶滅のおそれの程度について、表2のとおりカテゴリー(希少度のランク)別の基準を設定した。

カテゴリーの定義については、全国レベルと県レベ

ルの比較を容易にするため、基本的に環境庁(1997)のカテゴリーを採用し、これに準じて設定した。ただし、本県では、種や生育地の減少度について定量的知見が少なく、数値による評価が不可能な種が多いため、定性的要件を基にしたカテゴリーとしている。

カテゴリー区分は、「絶滅・野生絶滅(EX・EW)」、「絶滅危惧I類(CR+EN)」、「絶滅危惧II類(VU)」、「準絶滅危惧(NT)」、「情報不足(DD)」の5つの区分に加え、「その他の保護上重要な種(OT)」を設けた。

「野生絶滅」は、個人的に管理されているものをすべて確認することは困難であり、その産地の特定も難しいと判断されたため、「絶滅・野生絶滅(EX・EW)」として扱った。

「絶滅危惧I類(CR+EN)」は、定量的要件による明確な区分が困難であることから、環境省カテゴリーの「絶滅危惧IA類(CR)」と「絶滅危惧IB類(EN)」には細分しなかった。

「その他の保護上重要な種(OT)」は、生息基盤は比較的安定しているが、生息地が限定されており、県内に分布限界等が存在している種など、主に地理的な自然特性から保護上重要度の高い種のカテゴリーとして設定した。

カテゴリー別の評価

選定した種の絶滅のおそれの程度について、カテゴリー別の基準に従って評価を行った。

具体的には、3次メッシュの分布情報、並びに現地調査に基づく選定理由となる生育状況の実態や希少化の要因等の分析データをもとに、複数の専門家により種ごとに評価した。

表 1. 選定の考え方

選定の考え方	概念図	
	過去	現在
限定された特殊な場所に生息し、もともと個体数が少ない種、個体群が小さい種、地理的な固有性が高く分布域が狭い種で、現在の状況が、圧迫要因の作用など生息条件の変化により絶滅する危険性のある種	( )	
もともと個体数が少ない種、個体群が小さい種、分布域が狭い種で、過去から現在に至るまでの間に何らかの要因により生息条件が悪化し、さらに個体数が減少あるいは個体群・分布域が狭小化している種であって、圧迫要因が引き続き作用する場合に絶滅する危険性のある種		
かつては個体数が多かった種、あるいは大きな個体群であった種で、過去から現在に至るまでの間に何らかの要因により生息条件が悪化し、個体数が減少あるいは個体群・分布域が狭小化している種であって、圧迫要因が引き続き作用する場合に絶滅する危険性のある種		

表2. 「レッドデータブックとっとり」の 카테고리ー定義

区分および基本概念		具体的要件
絶滅 Extinct (EX)	鳥取県では既に絶滅したと考えられる種	過去に鳥取県に生息したことが確認されており、鳥取県においてはすでに絶滅もしくは少なくとも野生では絶滅したと考えられる種 【確実な情報があるもの】 信頼できる調査や記録により、すでに野生で絶滅したことが確認されている。 信頼できる複数の調査によっても、生育が確認できなかった。 【情報量が少ないもの】 過去50年間前後の間に、信頼できる生育情報が得られていない。
野生絶滅 Extinct in the Wild (EW)	野生では絶滅し、栽培下でのみ存続している種	
絶滅危惧Ⅰ類 Critically Endangered + Endangered (CR+EN)	絶滅の危機に瀕している種  現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なもの。	次のいずれかに該当する種 【確実な情報があるもの】 既知のすべての個体群で、個体数が著しく少ない、あるいは危機的水準にまで個体数が減少している。 既知のすべての生息地で、生育条件が著しく悪化している。 既知のすべての個体群が、その再生産能力を上回る採取圧にさらされているなど、その分布域で種の存続に支障をきたす要因が作用している。 【情報量が少ないもの】 それほど遠くない過去(30年~50年)の生息記録以後確認情報がなく、その後信頼すべき調査が行われていないため、絶滅したかどうかの判断が困難なもの。
絶滅危惧Ⅱ類 Vulnerable (VU)	絶滅の危険が増大している種  現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧Ⅰ類」のランクに移行することが確実と考えられるもの。	次のいずれかに該当する種 【確実な情報があるもの】 大部分の個体群で、個体数が大幅に減少している。 大部分の生育地で、生育条件が明らかに悪化しつつある。 大部分の個体群が、その再生産能力を上回る採取圧にさらされているなど、分布域の相当部分で種の存続に支障をきたす要因が作用している。
準絶滅危惧 Near Threatened (NT)	存続基盤が脆弱な種  現時点での絶滅危険度が小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位ランクに移行する要素を有するもの。	生育状況の推移からみて、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。具体的には、分布域の一部において、次のいずれかの傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 a) 個体数が減少している。 b) 生育条件が悪化している。 c) 過度の捕獲圧による圧迫を受けているなど、種の存続に支障をきたす要因が作用している。
情報不足 Data Deficient (DD)	評価するだけの情報が不足している種	次のいずれかの要素を有しているが、生息状況など、ランクを判定するに足る情報が得られていない種 a) どの生育地においても生息密度が低く希少である。 b) 生育地が局限されている。 c) 生物地理上、孤立した分布特性を有する(分布域がごく限られた固有種等)。 d) 生活史の一部または全部で特殊な環境条件を必要とする。
その他の保護上重要な種 Others (OT)	鳥取県の地理的な自然特性等から保護上重要度の高い種	生育基盤は比較的安定しているが、生育地が限定されており、県内に分布限界等が存在する種など、主として地理的特性から保護上重要度が高いと考えられるもの。